

第4回東海障害者歯科臨床研究会総会および学術大会レポート

今大会は近年、医療的ケアを要する在宅重度障害児の増加を見すえて、私達が地域でどのような支援ができるかを考える機会にしたいとの思いで、基調講演とシンポジウムを企画しました。歯科医師 71 名、歯科衛生士 62 名、看護師、10 名、その他 8 名の計 151 名の参加者がありました。

初めの基調講演には三浦清邦教授をお招きし「重症心身障害児(者)医療福祉の現状と課題～地域でみんなで連携して支えよう～」と題してご講演いただきました。三浦先生は今春、全国の医学部で2番目に開設された障害者講座の教授で、いま非常に注目・期待されています。全国的な重症児(者)の実態、特に在宅移行が進められていく中で、様々な場面で吸引や胃ろうの注入などの医療的ケアのニーズは広がり、介護関係者でも研修を積み医療的ケアを実施できる制度ができていること、また今までの「治す医療」から患者を取り巻く関係者が連携して進める「支える医療」へ転換していくべきで、特に嚥下障害への対応や口腔ケアの必要性についてのお話がありました。

後半は基調講演を受けてシンポジウムが企画されました。重症児の子どもを持つ森さんが、わが子の誕生から現在に至るまでの医療との関わりの中で苦労した本音の話で口火をきり、現在森さんのお子さんの訪問看護に関わっている看護師の吉野さんが、重症児と関わった経緯やその活動状況、続いて特別支援学校の教諭である丹羽先生が学校内での重症児の状況、食形態・介助の重要性について、さらに障害者のデイサービスを行っている施設職員の杉野さんが就学後の重症者との関わり、その食事の状況などをお話しされました。続いて今回のテーマである歯科的支援という立場から、多治見市で歯科医院を開業されている良盛先生が歯科医の視点から症例を提示し、重症児(者)といかに関わり合いを持つかの提案があり、引き続き、訪問口腔ケアを行っている歯科衛生士の立場から、柴田さんが訪問現場での具体的な摂食嚥下訓練、口腔ケアの状況や、重症児(者)のケアを行うことができる歯科衛生士の養成の必要性についてお話しいただきました。最後はコメンテーターの三浦先生も討議に参加され、会場からの質疑や活発な意見交換が行われました。今回の森さんのお子さんの例のように偶然に近い形で、看護師、歯科医師、歯科衛生士、教諭などの各職種が連携できたケースはまれであり、今後はすべての重症児(者)が同様に「支える医療」を受けられるような連携のシステム作りが急務であると思われました。また愛知県だけでなく岐阜県、三重県、静岡県、静岡県の歯科医師の先生方の意見もあり、東海地方での協力・連携が必要と思われました。様々な先生方の意見が次々に出てくる中、時間となり盛会のうちに閉会となりました。地域における役割としての自分たちにできること、やらなければならないことを深く考えさせられる会となりました。

終了後会場近くのレストランにて懇親会が開催され、48 名の方が参加いただき、日頃顔を合わせない会員相互の情報交換が和気あいあいと行われました。

次年度は静岡市障害者歯科保健センターの服部清先生を大会長に静岡市で平成 25 年 7 月 28 日の開催が予定されています。

文責 準備委員長
加藤篤 (愛知県心身障害者コロニー中央病院)